

# 3色配色の調和性に関する研究<2>

## — 配色作成方法の検討 —

150441145 山口穂高  
川澄研究室

### 1. はじめに

音楽には不協和音から協和音に音が移り変わる「解決」という理論がある。これにより協和音を単一で聞いた時よりも聴者が深く満足する効果があるとされている。

色彩においても同様の効果が表れると仮定し、前報では、“調和”配色のみを見るより、直前に“不調和”配色を見た方が“調和”配色の調和性が向上するかどうかを試す実験を行い、21人の個人データを比較した結果、効果の現れ方には個人差があることがわかった。（ここでは、実験者が予め調和・不調和を予想して作成したそれぞれの配色を“調和”配色・“不調和”配色と書く。実際にその通りかどうかは被験者に依存する。）また、予備実験から、対象とする3色配色の作成のしかたによって、効果の表れやすさが異なることもわかってきた。

本報では、“調和”配色を前報と同一の3色配色とし、“不調和”配色の作成方法を変えることにより、より“調和”配色の調和性を引き出す条件を探る。

### 2. 実験方法

前報で使った“不調和”配色と“調和”配色の組合せを5種類、および、それと同一の“調和”配色に対して“不調和”配色を2種類ずつ作り足して使用した（表1）。新たに作り足した“不調和”配色は、いずれも3色のうちの1色の色相に変化を与えて作成した。色相環上の色相の変化の方向や大きさ、3色のうちで変化を与える位置（上・右・左）の影響も調べるため、全15ペアの中で細かく条件を変えた。実験方法は前報と同じで、提示方法は提示A～Cの3種類、提示時間は10秒間とし、提示された最後の配色に対する「配色の組合せの良し悪し」を7段階（3～+3）で回答した。被験者は大学生24人の協力を得た。

表1 実験刺激

配色 No.	“不調和”配色	“調和”配色	推移
1-1			
1-2			
1-3			
2-1			
2-2			
2-3			
3-1			
3-2			
3-3			
4-1			
4-2			
4-3			
5-1			
5-2			
5-3			

### 3. 実験結果

表2は、提示C（“不調和”配色から“調和”配色へ時間的に推移）において提示B（“調和”配色のみ提示）より調和性が向上した被験者の人数比を示したものである。青の表示は向上、赤の表示は低下した人数比を示す。

配色 5-1 は前報で使用した配色ペアで、検定により調和性向上の有意差が確認された唯一の組合せであったが、今回“調和”配色は同一のまま“不調和”配色を新たに作り足して試したところ、調和性が低下して見える被験者が増えた。特に5-3は、色相環上で逆方向から色相を推移させたが、その傾向が顕著となった。原因としては、“不調和”配色が“調和”配色の調和性より低くなっていないことが考えられる。表2の最右の数値は、提示A（“不調和”配色のみ提示）より提示B（“調和”配色のみ提示）で調和性を高く感じた人数比を百分率で示したものであるが、配色5-3は特に低く、配色作成自体が成功していないことが確認できる。

配色 2-1 も前報で使用した配色ペアで、彩度を推移させたケースであった。今回、配色 2-2 と 2-3 の“不調和”配色は、2-1 と同じ高彩度を維持した上で色相を変化、すなわち彩度と色相の2要素を推移させるケースを試したが、調和性低下と感じる人が減ったものの、向上する人が特に増えたわけではなく、配色の作成精度との関係は不確かである。先行研究では、色彩の2要素より1要素を推移させる方が調和性向上に対して効果的であるという仮説があったが、それを証明することもできなかった。

### 4. まとめ

色彩の推移ルールや変化させる位置を変えて効果を比較した結果、色彩の推移ルールよりも、“不調和”配色より“調和”配色の調和性を高く作成できるかどうかの鍵となり、最終的な調和性向上に影響を与えるケースがあることが確認された。

表2 提示Cにおける調和性向上の人数比

配色 No.	“調和”配色	推移	調和性向上の人数比	%
2-1				47.6%
2-2				28.6%
2-3				42.9%
5-1				52.4%
5-2				47.6%
5-3				33.3%

